

令和 3 年度

鳴門教育大学大学院学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教科実践高度化系
芸術・体育系教科実践高度化コース
保健体育科教育分野

学修成果発表会



日時：令和 4 年 2 月 12 日(土)13:00~17:30

場所：オンライン開催



令和3年度
学校教育研究科高度学校教育実践専攻芸術・体育系教科実践高度化コース
保健体育科教育実践分野学修成果最終発表会

1. 日時: 令和3年2月12日(土)13:00～17:15

2. 場所: Teamsによるオンライン開催

3. 日程

(1)開会の辞 分野長 松井敦典

(2)口頭発表 一人30分(発表時間15分, 質疑13分, 交代2分)

(3)閉会の辞 大学院教務委員 南隆尚

発表者	指導教員	開始時間	論文題目
篠原 健真	松井 敦典	13:05	小学校体育科の学習指導におけるメンター制の在り方についての一考察 － 研修資料を用いた情報交換の実践を通して －
安岡 秀人	松井 敦典	13:35	ベースボール型の授業における資質・能力の3つの柱を育成する授業実践 ～知識・技能に注目して～
山田 純平	藤田 雅文	14:05	中学校女子生徒を対象としたサッカーの授業研究

休憩5分

江尻 沙和香	湯口 雅史	15:10	現代の子どもが未来を生き抜くために 必要とされる能力の育成に着目した体育授業づくり
佐川 寛和	湯口 雅史	15:40	「子どもの主体性を発揮させる教師の働きかけ」 ～バットレスベースボールの実践をふまえて～
森本 千晶	湯口 雅史	16:10	多様な子どものニーズに対応できる教師力の育成 ～学ぶ者の論理の沿った授業づくり～
和田 壮平	湯口 雅史	16:40	「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくり ～ベースボール型授業を通して～

小学校体育科の学習指導におけるメンター制の在り方についての一考察

－ 研修資料を用いた情報交換の実践を通して－

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 篠原健真

キーワード: メンター制, 研修資料, 小学校体育科

実習責任教員 松井敦典

実習指導教員 南 隆尚

I 緒言

徳島県では、教職員の大量退職・大量採用の時代を迎え、教職に関する知識、指導技術等の計画的・継続的な継承を目指し、平成 31 年 1 月徳島型メンター制度実施マニュアルが作成された。徳島型メンター制度では、メンター(先輩)とメンティ(後輩)で組織されたメンターチームで、メンターリーダーを中心に研修を進め、管理職やベテラン教員等がチームを支える体制を基本としている。この制度のメリットのひとつとして若手教員を指導することで、指導者側も自身の知識や教育技術を整理したり、学び直したりする良い機会になることが期待されている。2019 年に筆者が体験した徳島メンター型研修では、メンバー内での情報交換や先輩教員からの教育技術の伝承など、様々な効果が得られた一方で、研修内容の選定や時間の確保について課題が残った。

2021 年 4 月からの教科教育実践フィールドワークでは、小学校体育科のメンターとして置籍校の教員と関わることになった。その中で、体育の授業を充実させるための具体的なサポートの行い方について、新たな課題も生まれた。体育の授業を充実させるために必要な情報や、そのための研修システムと運用について検討し、実践を通して明らかになった成果課題をまとめることを本実践の課題とした。

II 研究内容

体育の授業を充実させるためには当然のことながら授業の準備が必要になるが、それぞれの種目の教師自身の運動経験や得手不得手に左右され教材研究や授業準備がうまく進まないことが多い。また、そのことが授業をする教師の自信や不安感につながっていることが置籍校の教員への聞き取りでわかった。学習指導要領において体育科の内容は、運動領域ごとに示されていることから、前述のようにそれぞれの運動種目と教師の関係が授業の指導に影響を与える。しかし、体育科の内容構成に目を向けると各運動領域の専門性と理論の専門性の相互関係の中で体育・保健体育科が成立していることがわかる。各運動領域の専門性は、指導経験や自身の運動経験によって高めることができるが、体育の理論については、中高教員免許(保健体育)の必修科目の内容を学ぶ機会がなければ専門性を高めることが難しい。そして、体育専門の理論は各運動領域に共通している汎用的な知識であることから、それらを学び各運動領域と関連させることで体育の専門性を高め、授業の充実につなげることができる考える。本実践では、この体育専門の理論を軸とし、メンティとともに学ぶことを通して、教科(体育)のメンター制研修のあり方を検討する。

III メンター制研修の計画

対象及び、期間、方法は次の通りである。

1. 対象

教職経験年数 8 年以下で、体育科の授業を担当している教員

2. 期間

2021 年 6 月～12 月（8 月を除く）

3. 方法

月に 1～2 回程度(全 9 回)、研修資料を作成し、対象教員に配布する。資料購読後 Google フォームを用いて、感想及び日々の授業実践についての質問や相談等を入力してもらう。感想・質問に対して個別に文書で返答し、意見交換をする。

IV 各実践の内容と考察

1. 研修資料 2「水泳指導について②」を例に

第 1 回の研修「水泳指導①」の続編として「もぐる・浮く運動に重要な浮力」と「進むための推進力と抵抗」について取り扱った。

「もぐる・浮く運動に重要な浮力」では、呼吸をうまく利用することで自分自身の浮力をコントロールすることができること、浮力を十分に得ることや安定した水平浮き身姿勢をとるための姿勢についてのメカニズムを説明した。「進むための推進力と抵抗」では、水中で進むための力を生み出す動作と、進むことによって生じる抵抗をできるだけ受けない姿勢をとることが技能のポイントであることを説明した。この研修資料で主に関連づけたのは体育専門のバイオメカニクスの知識である。この資料に対する先生の感想・質問例と筆者の返答については次の通りである。

1.1 メンターの感想・質問(例) 先生 D

- 人が肺に空気をためて浮力をコントロールできると初めて知った。考えたこと

がなかったので面白いと思った。

- 授業では、泳ぐときの姿勢を「何となく」指導してしまっていた。浮くことが十分でない状態の子に泳ぐ練習をさせるのではなく、頭の位置に気をつけて浮く練習をしっかりと指導していきたい。
- 進むことについては、バタ足だけでも進むスピードが全然違っていたので、姿勢が大切なのだとよく分かった。

1.2 筆者の返答(概要)

メンティの先生が、授業中の具体的な子どもの姿を思い浮かべ、バイオメカニクスの視点に気付いていることがわかったため、運動の出来栄を評価するときに、人間の身体や水を物理的な視点でとらえ、さらに運動もその視点で捉えるバイオメカニクスの考え方について伝えた。そして、運動全般をバイオメカニクスの視点でみることを促した。

2. 実践における考察

研修資料 2 は運動領域(水泳)と体育専門の理論(バイオメカニクス)の関係について研修資料を作成した例である。その他のテーマについても、体育専門の理論と学校における「体育」に関するテーマを関連づけた。

V 成果と課題

今回の実践を通して、メンティの授業に対する考え方や課題意識を知ることができた。研修内容の選定や、研修時間の確保には課題が残った。体育専門の理論と運動領域の関係について研究を継続する必要がある。

VI まとめ

小学校高学年の教科担任制に伴い体育もより専門性が求められる。校内や中学校区の教員でチームをつくってリーダーを中心に教科の専門性を高める研修を行うなどの方策が期待される。

ベースボール型の授業における資質・能力の3つの柱を育成する授業実践

～知識・技能に注目して～

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

実習責任教員 松井敦典

芸術・体育系教科実践高度化コース

実習指導教員 湯口雅史

保健体育科教育実践分野

氏 名 安岡 秀人

キーワード: ベースボール型, 知識・技能, 資質・能力の3つの柱

1 緒言

平成29年告示の中学校学習指導要領では、3つの資質・能力、すなわち、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、及び、「学びに向かう力・人間性等」をバランスよく育成することが求められている。しかし、フィールドワークなどの機会に接する多くの授業実践では、特に、「思考力・判断力・表現力等」を重視した授業が多く見られた。このような授業は、生徒自身が考える力を伸ばすことを意図していると思われる。ここで注意すべきは、生徒の自発的思考を促すがあまり、思考に必要な知識や情報が不十分な状態では、生徒自身で考えることが難しくなるのではないかと考えられる。筆者は、「教科教育課題フィールドワークⅠ」で、中学校のバドミントンの授業実践を行い、特に「思考力・判断力・表現力等」に重点を置き、生徒同士の教え合い活動を課題として行った。4人程度の班を作って、2人はラリーを行い、もう2人は観察し、アドバイスをするように指導した。すると、バドミントンの経験があったり、知識がある生徒は、腕の使い方や、スイング動作などに着目し、教えることができていた。しかし、そうでない大多数の生徒は、具体的なアドバイスができず、ラリーを見ているだけになっていた。これは、何を教えれば良いかわからないという状態であった。このように、目標となる

動作の要点やそれを評価するための観点が分からないなど、考える材料がない状態で授業を行っても、授業者が意図した教え合いを含む学習活動に導くことが困難であった。このことから、「知識・技能」の大切さを感じた。「知識・技能」を授業の中で習得し、思考するために必要な「知識・技能」を獲得できていることで、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」が高めやすくなるのではないかと考えた。そこで、本実践では、ベースボール型の授業について、知識・技能に注目して行い、「知識・技能」という土台を作り、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を高める授業実践を行っていく。

2 授業実践方法

授業実践は、徳島市内の〇中学校の2年生(30人)を対象にソフトボールの授業を行う。1時間目は試合のルール説明の時間を多く取り、その後試合を行ってみた。2～6時間目は、練習から試合の流れで行った。毎回の授業終わりにワークシートを書いてもらい、また、ビデオ撮影を行い、これらを参考に、次の授業では何を取り扱うべきか、生徒が何につまずいているのかを発見し、次の授業の構想を練った。また、授業中の様子、授業後のワークシート、ビデオから生徒の変化を考察し、授業の成果を検討した。

3 授業実践

授業前に考えたことを、前時の振り返りを踏まえて記述した。次に、授業の実際として、簡易的な指導案、その説明を行った。授業の振り返りとして、生徒のワークシートの記述を載せ、最後に、成果と課題を記した。2時限目を例に出し、説明していく。

2時限目は、主に打撃と守備の手立てを参考に、説明をし、打撃と守備練習を行った。授業の振り返りから、「僕は今日、投げるボールがけっこう飛びました。体の向きとかが大事だとわかりました。」「キャッチボールが楽しかったです。だんだんボールもキャッチできるようになりました。バットで打つのはまだまだできないけどがんばります。もっと力強く打つようにしてみようと思います。」「上手な子や先生に教えてもらって打てるようになった。キャッチボールも前回よりとれるようになった」といった記述が見られた。このことから、成果として、知識・技能のポイントを教えることで、自分の成長のためだけではなく、先生に教わったことを友達に教えている生徒もいたり、教えてあげ、うまくなったのが嬉しかったという生徒もいた。このように、何かできない子がチームにいた時に、チーム内で教え合いが生まれたことがよかった。

「知識・技能」を意識させたことで、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」が身に付いたのではないかと感じた。また課題として、説明が長くなると集中力が切れるのは、筆者自身の力量不足でもあり、長く話している、集中力が続くように指導することが大事だと感じた。しかし、できるだけ端的にわかりやすく説明する力も必要だと感じたので、次の授業から実践していきたい。

4 まとめ

今回の授業実践では、「知識・技能」という土台があれば、自分で考えるための材料がある状態になり、課題解決につながったり、自分がうまくできたことを伝えることができていた。たとえ、自分ではできなくても、知識という材料があれば、友人にアドバイスをすることもできていた。また、授業が進むにつれ、できることが増え、積極的に取り組むようにもなった。これらのことから、ベースボール型の授業における「知識・技能」に注目し、様々な手立てを行うことで、「知識・技能」という土台ができ、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」が育まれ、資質・能力の3つの柱をバランス良く育成することができた。

5 今後の展望

今回の研究では、授業実践の単位でもあるベースボール型で、「知識・技能」に注目することで、育成すべき3つの資質・能力をバランスよく育成することができたが、違う単位でもバランスよく育むことができるかが課題である。筆者自身、野球経験者であったため、「知識・技能」に関することは、多くの引き出しがあったが、違う単位では、引き出しがまだ少ないように感じる。ベースボール型の課題もいくつか見えた。また、今回は「知識・技能」に注目したことで、結果として「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育むことができたが、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育むための教師としての力量が必要になってくる。

中学校女子生徒を対象としたサッカーの授業研究

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

山田 純平

実習責任教員 藤田 雅文

実習指導教員 湯口 雅史

キーワード：中学校女子生徒、ゴール型、サッカー、授業研究

1. 課題研究計画の設計

日本サッカー協会は、日本代表を強化するための選手育成を目的とする「競技スポーツ」における事業や、自己の技術レベルに応じた社会人リーグの発足などの「生涯スポーツ」としてサッカーに取り組める環境の整備に努めている。さらに、日本サッカー協会は、学校体育におけるプログラムサポートや研修会などの活動¹⁾も行っている。また、サッカーは、現行の小学校体育科、中学・高等学校の保健体育科の学習指導要領において、ゴール型の種目として位置付けられており、生涯スポーツにつながるような指導が求められている。

筆者が中学生の時のサッカーの授業は、準備運動を行った後、すぐにゲーム形式の活動を行うという流れの授業がほとんどで、ドリブル練習やパス練習といった個人技能の向上を図る活動はなかった。そのため、サッカー経験者や運動能力が高い生徒ばかりがゲームに関わり、運動能力が低い生徒は、ほとんどボールに触れることができない状況であった。サッカー経験者や運動能力の高い生徒は楽しんでいたが、中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編²⁾で記されている目標達成を目指した授業ではなかったと考える。

サッカーは人気のあるスポーツであり、ほとんどの生徒がルールを理解しており、ゲーム形

式の活動を好んでいる生徒が多いと考えられる。しかし、人気のあるスポーツだからこそ、サッカーの多くの魅力を知り、サッカーをもっと「知りたい」と思うような授業内容が必要であると考え。ただゲーム形式の活動を行うだけでは、運動技能の二極化傾向が大きくなり、サッカー嫌いや体育嫌いが増えるのではないかと考える。

そこで、本研究では、日本サッカー協会が行っているプログラムサポートの中で、日本サッカー協会が出版している『新・サッカー指導の教科書』³⁾を活用して、中学校女子生徒を対象としたサッカーの授業研究を行い、生徒が技能の向上を実感し、新たな知識を得ることで、「楽しい」や「知りたい」を積み上げられることができ、サッカーを通してスポーツの深みと面白さを体感できることを企図した授業実践の結果の分析を行うことを目的とした。

2. 授業評価のデータ収集と分析方法

1. 教科教育実践フィールドワークⅡでの授業実践において、徳島市の J 中学校 2 年 4・5 組の女子生徒にアンケート調査及び授業後の振り返りシートを記入してもらい、授業内容が異なる各授業のデータを分析し、差異の詳細について確認する。

2. 調査票は『体育授業を観察評価する』⁴⁾の「形成的授業評価票」を基に作成し、「成果」、

「意欲・関心」、「学び方」、「協力」、「総合評価」の5つの次元で分析した。

回答の結果は、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として、次元別の平均と総合評価の平均を算出した。

3. 授業実践と結果

(1) 授業実践

教科教育実践フィールドワークⅡでは、研究授業を3回実践した。

1回目は、準備運動を行い、パス練習を行った後、すぐにゲーム形式の活動を行うという、筆者の中学校時代の時と同じ流れで実践した。

2回目は、「シュート」をテーマに設計し、〔準備運動〕→〔活動1〕→〔活動2〕→〔テーマに沿った工夫したルールของเกม〕の活動の流れで授業実践を行った。

3回目は、2回目と同様の流れで「パス」をテーマに設計して授業実践を行った。

(2) 結果

形成的授業評価票のデータは、対応のある一要因分散分析（TukeyのHSD検定）⁵⁾を行った。分析の結果、「成果」、「意欲・関心」「総合評価」の1回目と2回目、1回目と3回目でADL得点に有意な値を示し、1回目授業の平均点より2・3回目の平均点が明らかに高いことが確認された。「学び方」の結果は、1回目と3回目の比較のみADL得点に有意な値を示し、1回目授業の平均点より3回目の平均点が明らかに高いことが確認された。「協力」の結果は、3回のすべての授業で高い平均点であり、有意な差は認められなかった。また、2回目と3回目の自由記述の欄に、「楽しかった」「うれしかった」「またしたい」などの感想が多く書かれており、本研究の目的の1つである、「楽しい」

を積み上げることができたと考えられる。

4. まとめ

本研究では、日本サッカー協会が出版している『新・サッカー指導の教科書』³⁾を活用して、中学校女子生徒を対象としたサッカーの授業研究を行い、生徒が技能の向上や新たな知識を得ることで、「楽しい」や「知りたい」を積み上げられることと、筆者自身の「教職実践力」の向上を試みた。

3回の授業実践の形成的授業評価票のデータ分析をした結果、〔準備運動〕→〔パス練習〕→〔ゲーム〕の流れで行う授業よりも、「シュート」「パス」といった明確なテーマを掲げ、〔準備運動〕→〔活動1〕→〔活動2〕→〔テーマに沿った工夫したルールของเกม〕の流れで行う授業の方が、「成果」「意欲・関心」「総合評価」の3次元の評価が高いことが分かった。したがって、『新・サッカー指導の教科書』³⁾を活用して授業設計を行うことで、「楽しい」を積み上げられることができたと考える。

しかし、「知りたい」の観点では、ADL得点に有意な値を示さなかったため、「知りたい」を積み上げられることはできなかった。この「知りたい」の観点は、「学びに向かう力」に繋がると考えているため、授業を進めるにあたって、さらに探究しなければならないと考える。

5. 今後の課題

本研究の今後の課題は3つ考えられる。

1つ目は、単元を通しての授業設計についてである。今回の授業実践は、全12時間のうちの9・10・11時間目の3回で行ったため、生徒はサッカーに触れており、ある程度の知識及び技能が備わっている状態であった。また、今

回、J 中学校の普段のサッカーの授業は、ゲーム形式の活動ばかりではなく、知識及び技能の向上が見込まれる授業も行っていた。今回と状況が違った場合や単元の全授業を行う場合、今回の授業実践よりもさらに段階的な授業設計を行う必要がある。

2 つ目は、男女共修についてである。今回は、フィールドワーク校の状況に基づき授業実践を行ったため、女子生徒を対象とした。男女共修で行うことになった場合、運動技能の二極化傾向はさらに大きくなると考えられる。そのため、今回とは違う授業設計を考える必要がある。

3 つ目は、サッカー未経験者の先生がサッカーの授業を行った場合でも『新・サッカー指導の教科書』³⁾を活用することができるのか、についてである。筆者は、サッカー経験者であるため、『新・サッカー指導の教科書』³⁾に記載されている授業の構成や活動内容を理解し、生徒の運動技能に合わせた授業設計を行うことができた。しかし、サッカー未経験者が同じように活用することができるのかはわからない。

以上の3つを今後の課題とし、筆者のさらなる研修に活かしていきたい。

文 献

- 1) 日本サッカー協会 (2012) 学校体育・部活動TOP
https://www.jfa.jp/coach/physical_training_club_activity/
- 2) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編, 東山書房, pp. 121-142.
- 3) 日本サッカー協会 (2019) 小学校体育 全学年対応 新・サッカー指導の教科書, 東洋館出版社, pp. 6-15, pp. 24-111.
- 4) 高橋健夫編著 (2003) 体育授業を観察評価するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメントー, 明和出版, pp. 12-15.
- 5) 出村慎一監修 佐藤進・山次俊介・長澤吉則 (2009) 健康・スポーツ科学のための Excel による統計解析入門, 杏林書院, pp. 140-144.

現代の子どもが未来を生き抜くために 必要とされる能力の育成に着目した体育授業づくり

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 江尻沙和香

実習責任教員 湯口雅史

実習指導教員 綿引勝美

キーワード：協働する力，問題解決力，運動の本質的なおもしろさ

1 課題研究計画の設計

1.1 課題研究の動機

(1) 時代の流れと共に変化する子どもの質

筆者自身が保健体育科教員として勤務していた際に、時代の流れと共に子どもの質の変化を感じており、「コミュニケーション能力」、「解決能力」の低下を感じた。生徒は近い未来、社会で自立し、自分の未来を自分で切り開いていかななくてはならない時期が来る。そのために、現代の子どもが未来を生き抜くために必要な能力は何か、ということを筆者自身が学びたいと強く思っていた。

(2) 筆者の中学・高校教員時代の反省点から

筆者は、体育授業づくりをする際、「練習→試合（競争）→テスト」の流れを基本とし構想し、試合のルール・教具はオフィシャルで行うことが多かったため、運動の得意な生徒はどんどん活躍し、運動を苦手とする生徒は目立たないように取り組んでいる様子であったと振り返っている。運動を得意とする子ども・運動を苦手とする子どもの両者が「おもしろい」と感じ、主体的に課題解決へ取り組めるような授業づくりをしたいと考えた。

1.2 課題研究の目的

(1) 現代の子どもの未来へ向けて

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説

体育編第 1 章総説（文部科学省 2018）*¹によ

ると、現代の子どもが社会進出する未来、職業やあらゆる生活の場面で決まった答えのない問題へ自ら挑戦していく能力が必要とされている。また、「汎用的な能力」の育成を重視しており、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けるため、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取り組みとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されており、アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を図っていく必要がある。

(2) 大学院での学びから

筆者は、大学院での授業、ゼミ活動、学外での勉強会で、子どもがこだわりを持った課題解決へ向かうために、子ども全員が「運動の本質的なおもしろさ」の世界で学ぶことのできる授業づくりが必要であることを学んだ。筆者は、令和 2 年 10 月に鳴門教育大学附属中学校で課題探求授業を実践した際に、ネット型の本質的なおもしろさは「相手コートにボールを落とすか落とさせないか」と設定し、教具・場・教材に工夫を入れ、「ワンバウンドバレー」の授業実践を行った。実際の授業の様子、生徒からの授業後アンケートを振り返ってみると、大多数の生徒が積極的に参加し、各チーム課題解決へ

向けて取り組めていたと評価できた。

(3) 教職大学院での到達目標 3 領域 10 観点

本学の教職大学院では、教員に求められる教職実践力 3 領域 10 観点が掲げられている。筆者は、本課題研究で体育授業づくりに関する課題を持ったことから、「教科・領域内容研究力」、「授業実践力」の能力を伸ばすこと、今後の体育教員としての資質向上のために、「経験から学ぶ」、「未来に向けて学ぶ」ことに着目した。

2 課題研究プロセスの実際

筆者は汎用的能力の育成について探るため、東京学芸大学次世代教育研究推進機構と OECD（経済協力開発機構）の共同による「2030 年の社会に対応する次世代対応型教育をこどもたちへ」に向けたプロジェクト資料、動画、ホームページ（東京学芸大学次世代教育研究推進機構 2017）^{*2}を参考にした。この研究の中では、体育の授業で育成可能な汎用的能力の中に含まれている、「協働する力」と「問題解決力」が高い水準にあった。「協働する力」と「問題解決力」は筆者の育成したい能力と関連性が近いことから、この 2 つの能力を重視することとした。また、この 2 つの能力を育成するにあたり、学習指導要領（平成 29 年告示）で推進されている「主体的・対話的で深い学び」の内容を理解し、筆者自身の反省点である、「子どもへ一方的に技術を教え込む」授業ではなく、子どもが積極的に課題解決へ向かえる課題解決学習を目指したいと考えた。しかし、子どもがこだわりを持った課題解決へ向かうために、まずは、運動に対してマイナスイメージを持たないこと、全員が「運動の本質的なおもしろさ」に夢中になることが必要であると考えた^{*3}。

3 教科教育課題設定フィールドワークの学び

筆者が見学した授業では、授業中に提示された課題をできる順番からこなしていき、できるようになったら教師の前でテストを行うという授業であり、「成功した」「成功しない」のみで評価されていた。運動の得意な児童はどんどん上達していき、難易度の高い技へ挑戦していく。一方、運動を苦手とする児童は、「挑戦したい」という様子も見えたが、「できない」と認識した瞬間に、取り組みを辞めている様子であった。単元後半では、自己の成長が期待でなくなったり、体育の授業自体を嫌うようになり、運動を得意とする児童と運動を苦手とする児童の体育授業への意欲に差が生じると感じた。また、教員が提示した課題に対して「成功した」、「成功しなかった」のみを重視する授業では、児童同士が関わる場面が少ないことや、「どう協力していくか」、「どう解決していくか」という思考は生まれず、筆者が授業実践で狙いとする「協働する力」と「問題解決力」の育成は難しいと感じた。

4 フィールドワーク I の学び

4.1 学び

「ハードル走」の授業を行う予定だった。

(1) 事前調査

- ・6 年 1 組 24 名（男子 12 名、女子 12 名）
- ・6 年 2 組 24 名（男子 13 名、女子 11 名）

*クラス背景は事前に担任から調査済み。

(2) 授業構成

ハードル走の本質的なおもしろさを「ハードルをリズムカルに走り越えることがおもしろい」^{*4}と設定した。しかし、ハードル走に対して「怖い」、「痛そう」などの苦手意識の強い児童がいることから、まずは「おもしろそうだな」と印象を持たせる場（コーンにゴム紐を張

る、ミニハードル、フラフープ)を設定した。

5 フィールドワークⅡの学び

5.1 学び

(1) 授業構成

筆者は、「協働する力」と「問題解決力」の育成に着目し、「体の動きを高める運動」の本質的なおもしろさを「自分の思い通りに身体を操作することがおもしろい」*5と設定した。また、小学校学習指導要領（平成29年告示）体育編*6では、「小学校高学年では児童の発達段階を踏まえ、主として体の柔らかさ及び巧みな動きを高めることに重点置く」と記されていることから、「巧みな動きを高める運動」に重点を置き、また、「柔軟性を高める運動」は、毎時間継続的に行うことで高まるので、授業冒頭に取り入れるようにした。

(2) 授業評価方法

①授業実践中に筆者自身を感じ取ったこと。

②ビデオ分析。

③児童の振り返りアンケート。

(3) 授業の実際

1時間目：心を解き放つ運動（柔軟運動、ミラー遊び、全身じゃんけん）。

2～6時間目：柔軟運動、あんたがたどこさ、ボール使った運動（直上上げ、背面キャッチ、キャッチボール、ボール取りゲーム、ボールの転がし合い、ボールの弾き合いなど）。

6 考察

(1) 児童が運動に対して苦手意識を持たず、運動に夢中になれていたか？

2時間目～6時間目では、児童が「痛そう、怖い」などのマイナスイメージを持たないような教具・場・教材を扱ったため、苦手意識を示す児童や運動に抵抗感を持つ児童はいなかった。しかし、1時間目に行った教材と、「ボー

ルの転がし合い」の運動では、興味を示さない児童がいたことから、取り組みが止まってしまい、飽和状態の場面があった。また、6時間目に行った教材では、筆者が運動のめあてとして提示した「繋ぎ合うためにはどうするか」という目的から、「ネットを越すためにはどうするか」と、児童の思考が変わってしまい、筆者が提示しためあてに対しての課題解決へ向かえなくなっていた。

(2) 「協働する力」について

筆者は、「ボールの転がし合い」と「ボールの弾き合い」の運動で協働する場면을期待していた。しかし、1人で行う「背面キャッチ」の運動で児童の教え合う姿が見えた。筆者がその場面を見逃さず、急遽、「アドバイスをし合う時間」を設け、次の活動へ移らず、児童の協働する場면을更に深めることができたと感じている。また、「ボールの弾き合い」の運動では、ボールを繋ぐために「名前を呼び合う」、「なるべくバウンドを入れよう」など互いに約束事を作って取り組んでいた。一方、「ボールの転がし合い」の運動では、調整し合うために互いの走るペースを見合ったり、コミュニケーションを取り合う様子もあったが、飽和状態になっている児童に協働する場面を作れなかったことは反省点となり、協働できなかった理由として、「運動に夢中になれていない」と気づいた時点で教材内容に変化を取り入れるべきであった。

(3) 「問題解決力」について

筆者の主観ではあるが、児童の工夫が発現するのは、同じ運動を2回以上行った時が多く、運動に夢中になれていれば、児童自身が「上手になるためには？」と自然に考え始めるのだと考えた。しかし、児童が「運動に夢中になれていない」と感じた場面では、上述した「協働す

る力」同様、児童の工夫などは全く見られなかった。また、6時間目の「ボールの弾き合い」の運動で、ネットを使用した際に、児童のボールの弾き方に変化が現れ、筆者が運動のめあてとして提示した「繋げる」という意識から「ネットを越す」ための弾き方に変わっていた。教具・場の使い方によって児童の思考まで変化してしまい、解決する内容まで変わってしまうということが反省点として残った。

また、筆者は今回の授業実践で「一方的に教え込む」ことはせず、運動のめあてに対する細かいアドバイスは控えた。しかし、筆者が児童の運動開始前にアドバイスを伝えた場面があり、そこでは筆者が伝えたことだけ意識的に取り組む様子や、その時間の振り返りアンケートでは、筆者が伝えたアドバイスを「工夫」として記載されていた。筆者自身が課題としていた、児童自身が自ら解決へ向かうことを妨げることだったと反省し、次の時間では控えるよう努めた。

(4) 全体を振り返って反省・成果

今回の授業実践の反省点は以下の3点である。①筆者が「おもしろだろう」と考えることに対して、児童が同じく「おもしろい」とはならない、②教具・場の使い方で児童の思考は変わってしまう、③飽和状態の時にどう対応するか。

今回の授業実践の良かった点は以下の3点である。①教具に対してマイナスなイメージを持たせなかった、②児童の様子を見て臨機応変に「待つ」ことができた、③筆者の「協働する」場面と実際に児童が協働した場面が一致したこと、1人の運動でも発揮することができた。

(5) 筆者の今後について

筆者は今回の授業実践で「おもしろい」と考え、提示した運動に対し、児童が興味を示さず、飽和状態になったことや、筆者が扱った教具・場によって児童の思考を変えてしまったことから、「子どもの視点に立つ」ということをもっと学びたいと考えている。また、「協働する力」と「問題解決力」の育成に重点に置き、できるだけ筆者からのアドバイスは控えた。児童へ一方的に教え込むようなことをしなくても、児童はアドバイスし合う、解決へ向かおうとしており、「子どもに任せる」ことの必要性も感じた。筆者は今後、小学校・中学校・高校の体育の授業で教壇に立つ学生へ「体育の授業づくり」のおもしろさを伝えていく立場であるため、体育科教育について学び続けていく。

7 引用・参考文献

*1 文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）

解説体育編 東洋館出版社 2018 p. 3

*2 東京学芸大学次世代教育研究推進機構 第 20 回

OECD/JAPAN セミナーOECD からみる日本の教育政策 28,
July2018 日本・OECD 共同イニシアチブプロジェクトの取
組報告資料 東京学芸大学次世代教育 研究推進機構
2017 pp. 1-13

*3 徳島県小学校体育連盟研修部 第 57 回中・四国小学校体

育研究大会第 61 回徳島県小学校体育科教育研究大会研究
紀要 徳島県小学校体育連盟研修部 2019 p. 2

*4 徳島県小学校体育連盟研修部 第 57 回中・四国小 学校体

育研究大会第 61 回徳島県小学校体育科教育研究大会研究
紀要 徳島県小学校体育連盟研修部 2019 p. 22

*5 徳島県小学校体育連盟研修部 第 57 回中・四国小 学校体

育研究大会第 61 回徳島県小学校体育科教育研究大会研究
紀要 徳島県小学校体育連盟研修部 2019 p. 22

*6 文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説

体育編 東洋館出版社 2018 p. 118

「子どもの主体性を発揮させる教師の働きかけ」 ～バットレスベースボールの実践をふまえて～

高度学校教育実践専攻 教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 佐川 寛和

実習責任教員 湯口 雅史

実習指導教員 南 隆尚

キーワード: 子どもの主体性, 組織風土診断, 社会的構成主義

1 課題研究計画の設計

平成 29 年度の学習指導要領の改訂により、「主体的・対話的で深い学び」の実現が課題として示された。この改訂の意図として、子ども主体の授業づくりが求められていることが挙げられる。子どもが主体となり、こだわりをもって活動に取り組むことで発現した課題を解決することで深い学びを得る授業への転換が求められる。「主体的な学び」に着目し、子どもの主体性を発揮させるために教師としてどのような働きかけができるのかについて関心をもった。

筆者が小学校時代の頃、体育授業のルールや場づくりは競技スポーツが採用され、活動への参加に意欲的な子どもと消極的な子どもが見られるという二極化が発生していた。意欲的な子どもは自分のやりたいことを実践するなど主体性を発揮する一方で、消極的な子どもは言われるままに従うなど主体性を発揮しているとは言えない状況だったとふり返る。そこで、子どもが運動の得意・不得意関係なく活動に参加できるように、教師としてどのような働きかけがあるのかについて実践研究したいと考えた。

教科教育課題フィールドワークⅠでは、「体づくり運動」の授業実践を行った。子どもの実態に合わせた場や用具を工夫することで、子どもは活動に参加しやすくなり、主体性を発揮する場面が見られた。一方で、教師の働きかけが

原因で主体的に活動に参加できなくなっているのではないかと考えられる場面も見られた。

本実践では、FWⅠでの課題である教師の働きかけについて捉え直し、子どもの主体性を発揮させる教師の働きかけについて追求していく。

2 課題研究プロセスの実際

主体性には様々な定義があり、一概に「主体性を発揮している」と明言することは難しい。そこで、本実践研究における「主体性」について定義することで、教師の働きかけについて検討する必要がある。本研究では、OECD が掲げる「エージェンシー」の考えをふまえて、主体性を「活動において目標をもち、その実現に向けて何ができるか思考し、どのように関わっていくか判断し、責任をもって活動に参加すること」と定義した。活動において、この主体性が発揮される子どもの姿と教師の働きかけを捉えていく。

また、体育授業を考える上で、松田(2016)が整理した4つの学習観のうち、社会的構成主義で捉えた体育授業を検討していく。それにより、教師主体の一方的な知識の伝達ではなく、子ども主体の双方向な学びにつながる。主体的・対話的で深い学びを実現するためにも、社会的構成主義で捉えた体育授業を実践する。

教員の役割は、ファシリテーターである。子

ども同士がお互いの意見を認め合い、自信をもって子どもが活動に参加できるように、教員が仲介人となり関わっていくことが、子どもの主体性を育成することにつながると考える。また、ファシリテーターである教員の働きかけを検討する中で、子どもが主体性を発揮しやすい雰囲気になっているか考える必要がある。

3 課題研究の方法と実際

子ども達が主体性を発揮しやすい雰囲気になっているか調べるために、組織風土診断票を用いる。組織風土診断は羽石(1995)が考案したものであり、イキイキ型、シブシブ型、バラバラ型、イヤイヤ型の4つに組織風土を分類することができる。また、湯口(2006)は教員用に調査票を作成した。本実践では、湯口(2006)が作成した組織風土診断の調査票を用いることで、本実践開始前と終了後における結果を比較する。4つの型のどれに分類されるのかを示し、子どもの主体性が発揮されやすい雰囲気が形成されているのかどうかについて検討していく。

また、授業実践の内容を筆者が記入したフィールドノーツの事例を検討することで、子どもが主体性を発揮していると感じる場面や教師の働きかけについて示していく。

4 まとめ

4.1 組織風土診断の調査票

4.1.1 単元前と単元最後の結果

単元開始前では「イキイキ型」に分類されている一方で、単元最後では、4つの型に散らばる結果となった。PDS(組織環境)因子が低いことから、子どもの主体性が損なわれていることが可能性として考えられる。

4.1.2 男子における組織風土診断の比較

単元終了後に、Do(伝統性)因子が最大となる子どもが見られた。このことから、子ども主体の授業ができていたと考えられる。一方で、PDS因子が下がっている子どもがいる結果から、筆者自身がルールを強制する傾向があることが考えられる。

4.1.3 女子における組織風土診断の比較

Do因子が最大となる子どもがいる一方で、二極化が顕著に見られた。特に、PDS因子の差が大きい。このことから、子どもの主体性が大きく下がっていると読み取れる。原因としては、男子中心で授業が進むことに対して、教師の手立てが不十分であることが考えられる。

4.2 フィールドノーツの事例

一部の子どもは、本事例で定義している主体性を発揮していると言うことができる。教師の働きかけについては、「環境を整えること」や「発問」をすることで、子どもの主体性を育むことにつながると考えられる。

5 今後の展望

本実践では、「子どもの主体性を発揮するための教師の働きかけ」について検討した。本実践での主体性を定義づけ、組織風土診断の調査票やフィールドノーツを用いることで、「子どもの主体性」を発揮しているかどうかについて示した。しかし、本実践での主体性は「行為主体性(エージェンシー)」に限定しており、主体性には多くの定義や解釈があり、小学校での実践研究が少なく難しい問題である。来年度から教職員として子どもと関わる中で、子どもの主体性を育む手立てについて考えていきたい。

多様な子どものニーズに対応できる教師力の育成 ～学ぶ者の論理に沿った授業づくり～

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 森本千晶

キーワード：体育授業，社会的構成主義，PM メソッド

実習責任教員 湯口雅史

実習指導教員 松井敦典

1 課題研究計画の設計

1.1 課題研究の動機

私は、1年生の時に参加した主免教育実習で授業実践をした際に、挙手をする子どもの数が突然減ってしまうという経験をした。その大きな要因として、子どもが誤った回答をした際になぜそのような回答をしたかを考えずに訂正をし、授業が計画通りに行われるように誘導してしまったことが挙げられる。その原因として、効率性を重んじる論理に沿って学習を進めようとしてしまっていたことが考えられる。その結果、子どもの内に不安感が大きくなってしまい、積極的に発言する意欲がなくなってしまったのではないだろうか。

その経験から、子どもが主体的に学校生活を送ることができるような教師と子どものかかわりを観察することを目的として、課題設定フィールドワーク(以下課題設定FW)に参加した。

私が課題設定FWに参加した小学校は小規模校であった。授業場面だけでなく学校生活のほとんどが子ども主体となっているという印象を受けた。教師は、算数の問題を解く場面で、子どもの様子を見守りながら、どこまで理解していて、何に困っているのかを把握しようとしたり、事前にどこ

でつまずきそうか・間違いが出そうか・意見が分かれそうかなどできるだけ多くの事象を予想したり、対応策について考えたりしているという話を伺った。これが十分にできていないと授業の流れが止まってしまう、子どもの思考も止まってしまうのかもしれないと考えるようになった。また、授業導入時に行う「聞き取りゲーム」では、わざと間違えるように設定しており、子どもが「恥ずかしい」などマイナスの感情を抱かないための環境や声かけの工夫を見ることができた。理科の実験で、予想と結果にズレが生じたとき、「3年生にもこの結果を教えてあげたい！」という言葉が出てきた。このような課題設定FWの経験から学習を通して、子ども主体の「新たに知ったことを誰かに伝えたい。」と思えるような授業を実践したいと思うようになった。

1.2 課題研究の目的

これからの時代は、社会に出てからも学び続けることが求められる生涯学習社会である。このような社会での学校教育の役割を文部科学省は、「学校教育を終えた後も生涯学び続けていくために、その基礎となる資質や能力の育成を重視する必要がある。」としている。そこで教師には、子どもの立場に立ち、子どもの成長を支援して

いくようなかわりが求められるのではないかと考える。そのような授業づくりや子どもへのかかわりができる教師力を身につけることを目的とする。

2 課題研究の方法と実際

2.1 課題設定 FW

私は昨年度鳴門市内の小学校で10月26日から11月6日までの2週間、課題設定FWに参加した。前述したようにその学校は小規模校で、私はそこでその実態を初めて知ることができた。校内全員が互いのことをよく知っているような関係性があり、子どもの小さな変化に気づくことができ、実態把握をより密に行うことができることが小規模校の良さだと感じた。また、時間と心にゆとりがあるように感じる場面が多かった。このような環境で子どもたちは、自分のペースを大事にし、のびのびと学校生活を送っていた。私が課題設定FWを通して学んだことを3点にまとめて述べる。

(1) 授業観察からの学び

①「協働的な学び」について

体育の授業は合同体育で3～6年生が同じ環境で学習していた。ボール運動領域ネット型の授業では、「全員が参加できているか」「ルールやチーム内の声かけかわりはどうか」などゲームをよりよくしていくための方法を子どもが主体となって考える時間がゲーム前・後に設定されていた。この中で子どもたちは「全員で活動することの意義」を感じ、学んでいくと思った。その過程を観察したことで、「子どもたちと授業を作っていく」こととはどういうことなのかをイメージすることができた。

②「指導内容の明確化・指導方法の工夫と統一」について

3・4年生の国語の授業では、年間を通して「書く力」を育んでいくことを目標としているという話を伺った。新しい単元に入った際に、子どもたちは「出会う感想文」を、段落を意識しながら書いていた。年度始めの子どもの感想文と比較するとより自分の思いを相手にわかりやすく伝えられるようになっていと感じた。このように単元だけでなく、年間を通して子どもたちの資質・能力を育んでいくことの大切さを、身をもって感じることができた。

③「わかりやすく伝えること」について

5・6年生の理科・社会は同じ単元を学習している。つまり、5年生は現代の政治や国際的な学びなどについて学習せずに、歴史など6年生が学習する内容を学んでいるということである。そのため、本来であれば順序立てて既習事項を生かしながら学んでいくのだが、そのような学びができにくいという話を伺った。そのことを踏まえながら、授業実践を行なった際に、伝えたいことがうまく伝わらなかったと反省をした。その経験から、子どもたちがイメージしやすく、学びやすい環境づくりや言葉かけの難しさを感じた。

2.2 教科教育課題 FW I

私は今年度徳島市内の小学校で6月1日から7月15日までの1ヶ月半、教科教育課題FW I（以下FW I）に参加した。そこでは、これまでの課題意識から5つの観察の視点を持って実習に臨んだ。

(1) 授業観察からの学び

① 「子どもが自立して学べるようなかわり」について

子どもたちが自分の言動に責任を持つためには、自分で考え行動した結果から学んでいくことが大切ではないかと感じた。そのために教師は「不必要な助言や制限をしないこと」、「子どもが安心して生活を送れる環境をつくること」を心がけるべきだと感じた。

② 「子どもの学習意欲を触発し、維持していくためのかわり」について

子どもたちが主体的に学習するためには、課題意識を持つことが大切だと感じた。そのために、全体で共有する場面や、個々がどんなことに挑戦しているのかを見取り、的確な声かけ・支援を考えていくことが必要である。

③ 「子どもの実態把握の仕方」について

教師の思いよりも、子どもが“どうなろうとしているのか”を優先的に考え、子どもの思いを大切にしていけることを心がけていきたい。またその時、子どもを一つのものさしで見るのではなく、個を尊重し、成長を信じてかわっていくことが大切だと感じた。

④ 「子どもが自分自身と向き合う時間を設定するタイミング」について

授業内で自分自身やチームについて考える時間を設ける必要性を感じた。その時間は、「自分の価値観や考え方に気づくこと」ができ、その結果「他者との違いを認め、協働していくこと」につながっていくのではないかと考える。

(2) 授業実践の振り返り

① 授業実践の概要

私は今回、第6学年を対象にボール運動領域ゴール型（陣取り型）「フラッグフットボール」の授業を全7時間実施した。この単元を通しての学びは、「前に進むか、進ませないか」の攻防を意識するために、チームに合った方法を見つけ、それを生かした作戦を立て、ゲームに参加することを目標とした。メンター教員から、体育に苦手意識のある子どもが多いという話を事前に伺っていたこともあり、単元はじめは、ボールの運び合いを全員が個で味わうことができる場を設定し、徐々にチームを意識できるように展開を構想し、実践した。

② 「PM メソッド」の活用

今回は、私の授業のくせや課題を明らかにすることを目的として、第3時間目の授業を「PM メソッド」を用いて授業分析を行った。その結果、かわりや活動に対しての評価など声かけが全体的に少なく、ルールの確認や「おー！」や「ナイス！」など抽象的な承認など最低限の発言に留まってしまった。その結果、「コントロール」や「直接的指導」が多く、客観主義的な授業展開になっていることが明らかになった。

③ 考察

これらを踏まえ、FW Iでの授業実践全体を振り返ると、「子どもが自分やチームと向き合う時間の設定や、その必要性を子どもが感じる言葉かけが少ないこと」、「構成主義の授業や子どもへのかかわりの強化を志向しているが、実際は客観主義の傾向が強いこと」が明らかになった。

2.3 教科教育課題 FWⅡ

私は9月1日から11月26日までの約3ヶ月間、FWⅠと同じ小学校で教科教育課題FWⅡ(以下FWⅡ)に参加した。FWⅡでは授業観察や授業実践の時に、「何を学んでいるのか」、「どんなことに挑戦しているのか」に意識を向けることを心がけた。

(1) 授業観察からの学び

① 「遊びと学びの関係性」について

子どもたちが夢中になっている遊びの中に「タッチ de ジャンケン」というものがある。この遊びで子どもたちは、「どうすれば優勢になれるか」、「王様はどこにいればいいのか」など攻防を様々な角度から考え、試行錯誤していた。初めは、互いが城の近くで待ち、相手が攻めてくるのを待っている状態だった。次第に境界線で駆け引きをするようになった。そして、兵の後ろに王がついていくような陣の体制に変化していった。このような中で子どもたちは、「兵を減らさないこと」が大切だと気づき、そのために何ができるかを考えているように見えた。このような姿から、「遊びの中からも学びが生まれる」と考えるようになった。

② 「主体的に取り組むための環境」について

子ども一人一人が課題意識を持って活動に取り組んでいるかどうか、学習意欲に大きく影響していた。メンターの先生は意欲が停滞している子どもが多いと判断したとき、活動を一度止め、問いを再度確認していた。その結果、意欲を持って活動している子どもが増えたように見えた。「どうしよう」や「こうしてみよう」など子どもが課題意識を持ち、挑戦したいと思えるような環境・声かけの大切さを改めて感じた。

(2) 授業実践の振り返り

① 授業実践の概要

私は今回、第6学年を対象にボール運動領域ゴール型「サッカー」の授業を全8時間実践した。この単元を通しての学びは、「ゴール前の攻防」を意識するために、チームにあった方法を見つけ、作戦を立て、ゲームに参加することを目標とした。作戦を立てる際に動きを客観的に捉え、イメージしやすくすること、活動前に動きを確認することをねらいとして、5時間目から作戦ボード(タブレット)を活用した。単元は、子ども全員が運び合いのおもしろさを経験でき、オフ・ザ・ボールの動きの重要性に意識が向けるような展開を構想し、実践した。

② 「PM メソッド」の活用

今回は、前回明らかになった課題・改善案を意識して実践した授業がどう変容したかを明らかにすることを目的として、第2時間目、第8時間目の授業を「PM メソッド」を用いて授業分析を行った。その結果、かかわり、評価する回数が大幅に増加し、その中でもM機能が増えたことが成果として挙げられた。しかし、子どもが自ら考えたり、話し合っていくためのかかわりや全体に共有するかかわりが少なかったことが明らかになった。

3 今後の展望

今回の研究で、子どもへのかかわり方や思考の深まりに気づくことができた。単元を通しての学びのビジョンを持つことや子どもの気持ちに寄り添い、かかわっていくことがこれからの課題である。

「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくり ～ベースボール型授業を通して～

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 和田 壮平

実習責任教員 湯口 雅史

実習指導教員 藤田 雅文

キーワード: 運動嫌い, 体育嫌い, ベースボール型, 本質的な面白さ, 共感度調査

1. 課題設定の動機と背景

中学校学習指導要領（H. 29 告示）では、これまで文部科学省が課題としてきた「運動好嫌の二極化」の割合は下がったものの、「運動習慣の二極化」が問題視されている。スポーツ庁（2018）の報告書によると、中学校女子では一週間のうち「ほとんど運動をしない」という割合が約 2 割存在することが明らかにされている。また、これまでの多くの先行研究から『運動嫌い』より『体育嫌い』が多く存在し、その傾向は女子に強いということが明らかになっている。また学年進行による変化としては、『運動嫌い』『体育嫌い』は学年進行とともに増加し、その傾向は女子に強いことも報告されている。昨今では、時代と共にゲームや SNS の普及、遊び場の減少など生活様式にも少しずつ変化が生じている。これにより、運動に親しむ機会は益々と減少し、体育の時間は運動に親しむ機会を確保する貴重な時間となりつつある。

私はこれらを踏まえ、体育教師として、運動や体育が嫌いな子どもに、体育の授業を通して運動に好意的な感情をもってもらいたいと考えた。

本報告書は、以上のような経緯に基づき「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくりについて研究し、まとめたものである。

2. 課題研究実践の分析

授業実践は、徳島市内の K 中学校の 2 年生の女子（37 名）を対象に、『運動嫌い』『体育嫌い』の子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくり」を研究テーマとし、単元 7 時間構成でベースボール型の授業を行った。また、実践研究の分析には藤谷（1999）の共感度調査を用いた。共感度調査とは、4 つの尺度（①状況対応②個人的苦悩③視点取得④共感的配慮）からなる調査票 28 項目を基に、体育学習での意識変容の実態を捉えるものである。課題研究実践では、分析結果から「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもが他者に「共感」し、「共生」していく中で、自己の中にどのような変容があったのか、さらには全体の分析結果を統計的に見たときにどのようなことが言えるのかを明らかにし、その結果から教材（学習材）がもたらした効果について考察した。

3. 授業構想

ベースボール型の授業構想を行う上で以下の 3 点を軸にした。

①全員が活躍でき、成功体験が得られる

②コンピテンシー・ベイスの教師のかかわり

「様々な場面に適用していける汎用性の高い能力」

→得た情報を基にどこに打つか、どこを守る

か、どこに投げるかを即時に判断する能力（ゲーム技能）

「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」

→「いかにして仲間を進めるか」「いかにして相手を進塁させないか」を自身で思考し、行動した結果を振り返り、反省を基に次に活かしていける能力

③教科の本質と照らし合わせる

ベースボール型の本質的な面白さである「塁上の攻防」に全員が夢中になれる教材（学習材）の工夫

4. 授業実践の分析結果と考察

試合での仲間との協力や作戦を立てるといった行動により、相手の立場への置き換えができるようになり（視点取得）、その中で共感意識（共感的配慮）が高まっていったと考えられる。また、単元を通して自分がプレイする場面を想像したり、状況によって自分ならどのような行動をするかを考えたりする意識（状況対応）が増加していたことがわかった。これはゲーム展開が早く、運動学習量や活動量が多かったことにより子どもに思考の深まり（思考力・判断力・表現力等）が育まれていったと考える。一方で、実践研究では「個人的苦悩」が増えたという結果となった。これは「打つ」「捕る」「投げる」などの個人の技能向上だけではなく、「塁上の攻防」を行う中で「どこに打って進塁させるか」や「どこに投げてアウトにするか」といった作戦などから、個人に役割を持つ機会ができ、責任が生じたことによるものだと考える。しかし、授業後の子どもの振り返りを見ていくと、「協力することの大切さを学んだ」「ミスをして声をかけてくれて次は頑張

ろうと思えた」「アドバイスをしてもらったりして上手くいったときは嬉しかった」などの感想が単元を通して多数見られた。したがって、学習集団として協同的に課題解決学習に取り組むことで、他者との関わりの中で自己の苦しみ（個人的苦悩）が軽減される可能性があるのではないかと考えた。

結論

FWⅡで行った授業において、「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもに関わらず、多くの子どもが好感を持って授業に取り組んでいたことがわかった。これは「打つ」「捕る」「投げる」という基本的に言われている技能が高くなくても「塁上の攻防」に夢中になれたこと、そして「ゲームに参加する楽しさ」だけではなく、仲間のプレイを見て感動したり参考にしたりする「みる楽しさ」や、学習集団として仲間と協力し、作戦を立てながら声を掛け合っていく「ささえる楽しさ」、そして単元を通してベースボール型の本質的な面白さ（塁上の攻防）を「知る（知っていく）楽しさ」を全員が感じられる授業であったからだと考える。一方で、一部の子どもからは否定的な回答もあった。このことは、子ども全員にベースボール型の本質的な面白さを理解させられなかった部分の関わり方に問題があったと振り返っている。

今後の自身の課題として、「技能獲得中心のコンテンツ・ベースな学習」と「人と人との関わりを重視したコンピテンシー・ベースな学習」をいかに組み合わせていけるか。その仲立ちには体育種目のもつ本質、つまり「本質的な面白さ」があり、これを教師が中心に位置付けて教材（学習材）づくりをしていくことが大切であると考えた。